

巻頭言

2009.2月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

世界で一番、爽やかな顔

茗溪塾塾長 宇野 雅春

朝、暗いうちから家を出る日が続いています。普段は夜が遅い仕事なのに、この時期は早起きが日課になります。いつの間にか定着した早朝激励ですが、一昔前なら、なかなか積極的に参加してくれなかった講師達も、この頃は進んで飛び回ってくれるようになりました。ほんの一瞬の握手と一言。白い息を吐きながら待っている間も、心の中はあれやこれやでどろどろしています。毎年のことなのですが、自分の心づもりでは、既に関わった生徒は全て第一志望に合格している気持ちでいるので、現実と直面すると戸惑うことが多いのです。思ったようには事は運ばず、「思わぬ不合格」や、「やばりの不合格」に心は乱されます。指導に甘さがあったのではないか、もっと詰めるべきだったのではないか？練習量が足りなかったかもしれない...などなど。

たくさんの合格より、一人の不合格の方がずっと重く尾を引いていきます。よく思い出してみれば、「実は去年もそうだった」と思いつきます。合格する力のあるはずの子がなかなか合格を取れないで、ずーっと祈るような気持ちで過ごしたことは、去年もありました。最後に取った「合格」で、それまでのことはなかったかのように心から消え去り、遠い昔のことに感じられます。

「今が一番苦しい」という風に思えるのです。ほとんどのクラスリーダーがそんな気持ちを引きずって、激励に来ています。「合格」「不合格」は当然のようにマイナスの行動をつくります。何となくふてくされて見える生徒も気になります。変に陽気になって騒いで見せる生徒も気がかりだし.....。「不合格」がきっかけで家にこもってしまう生徒を説得に行く先生もいます。

そんな日々、合格した生徒に素直に喜びも伝えられないくらいに、心の緊張が続きます。先生達の中にも病人が出たり、自分自身のテンションも調整不能になってトラブルを作ることもあります。そんな自分を家族も含めて誰も支えてはくれないものです。皆それぞれに大変さを抱え持っているからです。これは「受験生」も同じだと思います。誰も受験生自身の苦労や心の落ち込みを肩代わりすることは出来ません。自分自身の力で這い上がって来れないのです。

「辛いだらうな」と思うだけで、励ます以外にやれることはありません。毎日の学習をサポートし、気になることを逐一注意し、演習を積み上げさせ、そして受験会場に向かわせる日々がいつ終わるともなく続いていきます。

早朝の校門の前で、昨日落ち込んでいたけれど今日はちゃんと来るだろうか？などと考えてしまいます。1時間30分前にスタンバイして、次々来る受験生と握手を交わし、「受験は心の勝負です」と書いた鉛筆を手渡します。集合時間が近づいても気がかりな生徒が現れないと、多少不安になります。でもこのパターンはいつも良い意味で裏切られます。どの生徒もホントにしっかりした表情で現れます。やっと来てくれた生徒がにっこり笑って握手をしてくれたとき、全てが報われた気になります。

「受験」は何か1つ、自分が越える体験です。早朝の冷えた空間の中で待っていると、いくつもの困難を越えて、生徒がそこにたどり着いてくるような気がしてしまいます。

その時の受験生の笑顔が、私には「世界で一番爽やかな顔」に思えます。そんな笑顔が自分を支えてくれているように思うのです。

「頑張っ！」という気持ちに嘘はありません。あとは、「合格」を祈るのみです。